

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	古代末期ティールの墓地と社会 : アル=バース・ネクロポリスの分析から
Author(s)	奥山, 広規
Citation	史学研究 , 305 : 51 - 67
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055684
Right	
Relation	



古代末期ティールの墓地と社会

—アル＝バース・ネクロポリスの分析から—

奥山 広規

はじめに

アル＝バース・サイトのネクロポリス（以下、アル＝バース・ネクロポリス）は、東地中海（現在のレバノン共和国南部）の港湾都市ティール⁽¹⁾の広大な墓地である⁽²⁾。半島に位置する都市の陸側の玄関たる都市門のすぐ外、ティール都市部へと至る道路の両側に展開し（図1）、掘り出されているだけでも東西500m以上、南北約100mに及ぶ。機能期間も長く、154/155年と609年に年代づけられる碑文⁽³⁾が出土していることから、少なくとも2～7世紀に亘った。アル＝バース・ネクロポリスの長期性は、埋葬施設の継続的使用の多さにも反映され、その証拠として例えば1基の石棺上における複数の碑文の存在⁽⁴⁾や、碑文が削り取られた事例⁽⁵⁾を挙げることができる。

このアル＝バース・ネクロポリスは1959年から1975年にレバノン考古総局長 Maurice Chéhab 指揮の下で体系的な発掘が行われ、埋葬施設の密集（石棺、納骨堂・納骨室、それらが収められた40以上の埋葬複合体（Funerary complex, Funerary enclosure：図2））と、金銀細工・ガラス製品などの副葬品の相次ぐ発見によって注目を集めてきた。

またそれは300点以上という非常に多くのギリシア語碑文（主として石棺や納骨室の閉じ蓋に刻銘された墓碑碑文と宛名碑文（埋葬施設の所有を示す碑文））の発見にも因る⁽⁶⁾。とりわけ注目されたのが、碑文に現れる「職業」であり、その分析によって、アル＝バース・ネクロポリスは古代末期にティールの「中間層」、すなわち商人、職人、下級聖職者などの墓地であったと考えられている⁽⁷⁾。「職業」分析にあたっては、碑文の彫られた埋葬施設の「材質」や「埋葬形態の差異」（石棺なのか納骨室なのか）も考慮され、大理石の高い価値、石棺と納骨堂の差、つまり、「中間層」における財産や社会的地位の差異、具体的には、染色関係職を頂点とし、底辺の個人で埋葬施設を所有できず集団で納骨室に埋葬されるものたちまでのグラディエーションも明らかにされた。この時点で問題となるのは、ほとんどが古代末期に属する碑文内容の分析を軸とするためアル＝バース・ネクロポリス形成当初である2～3世紀頃を検討できないことである。形成当初の検討の欠如は、少なくとも500年に亘るアル＝バース・ネクロポリスの長期性を等閑視してしまう。

そこで筆者は、アル＝バース・ネクロポリス形成当初について考古学的情報を軸とする検討を行った⁽⁸⁾。具体的には、埋葬施設と墓地景観を、アル＝バース・ネクロポリスに先行して成立し、並存した郊外の伝統的墓地と比較することで、形成当初のアル＝バース・ネクロポリスが、ティールの「上層」の墓地であったと見なしている。その理由の1つは、当該期には高価な輸入大理石製石棺がアル＝バース・ネクロポリスに大量流入していたことである。それはローマ帝国主導の大理石交易ネットワークの賜物であり、道路沿いに展開する墓地景観は、ローマの影響を受けて新たに形成されたもので、郊外の伝統的墓地とは全く異なっていた。そして、以上のような墓地の情報、すなわちアル＝バース・ネクロポリスの形成・発展は、ティールとローマの関係情報とも関連しており、ティールの「ローマ化」過程の一端と理解できる。

以上が筆者による検討の要約であるが、その論考の刊行後、考古学的情報を軸とする他のアル＝バース・ネクロポリス研究が存在していることを知った。それは de Jong の2010年の論考で、Maurice Chéhab による4巻本のアル＝バース・ネクロポリス発掘報告書⁽⁹⁾を分析、再構成したものである。無論筆者も発掘報告書に注目していたが、レバノン内戦の混乱のために重要情報（例えば体系的なアル＝バース・ネクロポリスプラン、層位情報、土器実測図）が失われ、収録されておらず、体系的なその分析は途上であった。ところが de Jong は、発掘報告書などに記された座標やわずかな平面図、そして衛星写真と空中写真を駆使し、暫定的ではあるが見事にアル＝バース・ネクロポリスプラン（図3）を、さらには発掘報告書などの遺構や遺物情報（ガラス器実測図、埋葬施設、碑文、わずかな層位情報）を利用して、少なくとも3つの段階⁽¹⁰⁾からなるアル＝バース・ネクロポリスの発展を提示している。そして、シリアにおけるローマ以前の政治的構造（地方王国、都市国家など）が終焉しローマ属州行政への統合されていく社会的変化のなか、アル＝バー



図1 アル＝バース・サイト
(前方に都市門、両側にネクロポリス)



図2 埋葬複合体 (Com. 2)
(壁に囲まれた空間：前方に石棺、
後方に納骨堂・納骨室、その上に石棺)

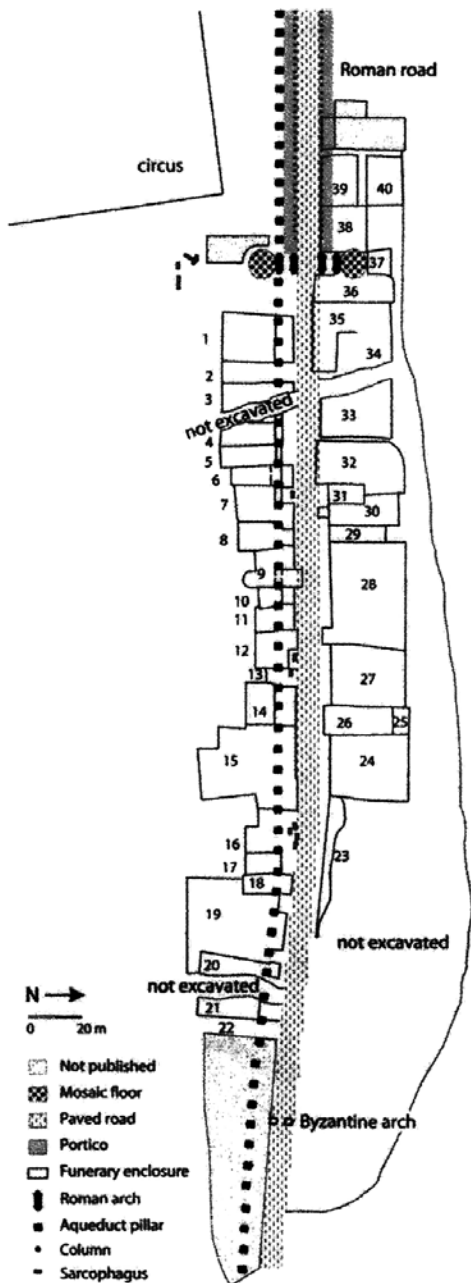


図3 アル=バース・ネクロポリスプラン
(de Jong (2010), p.600, Fig. 2から転載)

ス・ネクロポリスが地方権力構造の表明と再定義の場、すなわちティール住民の市民アイデンティティー、所属集団、経済力をディスプレイする場であったことも明らかにしている。de Jong の視線は古代末期にも向けられているが、アル＝バース・ネクロポリスの時系列的变化とその理由提示に力点がおかれているため、変化の著しかった1～4世紀の分析が主軸であり、古代末期については、その機能変化の可能性を指摘するにとどまっている。

本稿は、筆者が行った検討の続編、あるいは de Jong の検討の補完にあたる。つまり、形成当初以来の情報を踏まえた古代末期アル＝バース・ネクロポリスの再検討であり、従来の碑文分析から漏れ落ちるアル＝バース・ネクロポリスの長期性を考慮するものである。具体的には副葬品の情報を利用する。その理由は、埋葬施設の継続的使用が頻繁であるが故に、その新しい時代、すなわち古代末期の情報を得られること、そして、豊富な出土物があり、発掘報告書にまとめられているが、管見の限り、副葬品をふんだんに用いた先行研究は存在しないことにある。これは層位学的詳細や遺骸との関係が不明なうえ、ランプや土器などの重要同伴遺物が未刊行、あるいは行方不明のためである。そのため、利用できるデータには限りがあり、表面的な分析にならざるを得ないが、多少なりとも当該期のティール像をつかむことを意図している。

1 アル＝バース・ネクロポリス出土副葬品

発掘報告書⁽¹¹⁾によれば、アル＝バース・ネクロポリスには747基⁽¹²⁾の埋葬施設がある(石棺334⁽¹³⁾基、納骨堂・納骨室⁽¹⁴⁾304基、墓(Tombe)⁽¹⁵⁾100基、その他(Caveau、Cella、Fosse)⁽¹⁶⁾9基)。埋葬形態は土葬であった。火葬の痕跡はほとんど見られず⁽¹⁷⁾、またそれは、遺体を収めるための鉛棺(15架)⁽¹⁸⁾、陶棺(6架)⁽¹⁹⁾、そして、釘の出土(36基⁽²⁰⁾)から想定される木棺の存在に拠っている。鉛棺や木棺は石棺の中でも見出されており、石棺は遺体を直接に納める棺のみならず郭としても機能しただろう。

副葬品データが抽出可能なのは、その内437基(石棺180基、納骨室205基、墓45基、その他7基)であり、総数の約59%にあたる(表①)。約半数から抽出できない理由は、単純に盗掘被害のほか、再利用時の除去、つまり墓に新たに遺体を埋葬する際に、古い邪魔なものをどかしたためかもしれない。実際、表②で示す通り、データ抽出可能の中でも出土物品の数や種類に落差がある。ただ、複数の頭蓋骨が見出されることを踏まえれば、遺骸は追葬や再利用時に除去されなかったようであり、盗掘被害のほうがありそうである。

表① 埋葬施設

Com	総数	S	L	T	その他	データ抽出可	S	L	T	その他
1	30	11	17	2		20	7	12	1	
2	12	6	6			7	1	6		
3	13	11		2		4	3		1	
4	15	7	8			10	5	5		
5	21	11	6	4		7	3	4		
6	14	7	5		2 (Caveau)	12	5	5		2 (Caveau)
7	19	8	9	2		16	5	9	2	
8	0					0				
9	26	5	11	5	5 (Cella)	11	5	1	2	3 (Cella)
10	9	2	2	5		6	2	1	3	
11	10	6	4			7	6	1		
12	22	6	16			20	5	15		
13	9	7		2		7	5		2	
14	11	1	10			9	1	8		
15	17	9	5	3		13	8	3	2	
16	50	17	28	5		38	12	21	5	
17	9	8		1		8	8			
18	24	8	14		2 (Fosse)	19	3	14		2 (Fosse)
19	73	51	17	5		55	40	12	3	
20	11	6	3	2		2		2		
21	4	4				2	2			
22	12	7	5			5	3	2		
23	12	10	2			4	2	2		
24	36	20	13	3		14	9	5		
25	2	2				0				
26	15	1	14			12	1	11		
27	0					0				
28	35	25	6	4		14	8	4	2	
29	8		6	2		3		1	2	
30	42	8	28	6		24	3	17	4	
31	35	6	21	8		20	3	13	4	
32	32	12	7	13		18	7	7	4	
33	24	9	15			16	6	10		
34	18	8	9	1		11	4	7		
35	28	9	10	9		9	3	2	4	
36	26	15	7	4		12	5	5	2	
37	6	4		2		1			1	
38	0					0				
39	13	6		7		0				
40	4	1		3		1			1	
合計	747	334	304	100	9	437	180	205	45	7

※ Com = Complex (埋葬複合体)、S=Sarcophagus (石棺)、L = Loculus (納骨室)、T=Tombe (墓)
Com 番号は図3のものに対応している

表② 埋葬施設における出土物品の落差

Com.23, M.916-917, L.2	Com.23, S.927-928
頭蓋骨×6	
貨幣：501-550年×4（青銅） 551-600年×7（青銅） 6世紀×3（青銅）	
装身具： イヤリング×2（銀）、1（青銅） プレスレット×6（青銅） 指輪×8（青銅）、1（鉄） 輪×3+複数（青銅）、7（鉄） 玉×1（ガラス）、1（赤水晶）、1（黒石）、複数（紅玉髓、翡翠、骨） 鈴×4（青銅） ベルトのバックル×5（青銅）	装身具： イヤリング×1（金）
器：Flacon×1（ガラス） Unguentarium×1（ガラス） 不明×1（ガラス）	
その他：ランプ台×1（青銅） ランプ×1（テラコッタ） 鉄釘×1+複数 へら×1（青銅） 楕円形物品×1（石灰岩）	その他： 金糸（織物由来） 鉛の断片（鉛棺の一部か？）

（1）副葬品

最大数の出土物は貨幣であり、少なくとも314基の墓から1535点出土している。金貨（43点、14基）、銀貨（71点、48基）、黄銅貨（22点、21基）、青銅貨（金メッキ・銀メッキされたものもあり）⁽²¹⁾ からなり、その中でも青銅貨が圧倒的に多い（約83%：1273点、282基）。

次いで代表的なものは、装身具である。多い順から、イヤリング（813点（金、銀、青銅製など）、247基）、プレスレット（241点（ガラス、青銅、鉄製など）、134基）、指輪（150点（鉄、青銅、金、銀製など）、81基）、ピン（131点（骨、象牙、青銅製など）、95基）、ネックレス（10点（骨、木、金製など）、9基）。ネックレスが少ないのは、その分解のし易さのためと考えられる。つまり、88基から141点が出土している鈴（青銅、銀製など）は、発掘報告書においてネックレスの一部と判断され、なによりも224基から910点以上が出土している玉（ガラス製など）の存在が大きい。大体1から3cm ぐらいの大きさで、穴が開いているものも多く、ネックレスであった可能性が非常に高い。80基から150点出土している輪状物品（青銅、銀製など）は、うまく識別できないけれども、イヤリング、指輪などかもしれない。金糸（38基）と銀糸（1基）は、死者が着ていた衣服を飾っていたものだろう。ベルトのバックル（45点（青銅、鉄製）、34基）も出土している。

器も多い。主にガラス製とテラコッタ製で、わずかに青銅製もある。

ガラス製224基：器種不明（184以上、150基（29基で複数）、Amphorette（小型アンフォラ：2点、2基）、Balsamaire（香油瓶：64点、44基）、Bocal（広口瓶：54点、

古代末期ティールの墓地と社会—アル=バース・ネクロポリスの分析から— (奥山)

46基)、Bol (碗：6点、5基)、Bouteille (瓶：15点、12基)、Burette (小瓶：46点、37基)、Carafon (小型カラフ：11点、10基)、Flacon (小瓶：23点、21基)、Gourde (水筒：19点、17基)、Double Tube (二連瓶：3点、3基)、Gobelet (コップ：1点、1基)、Tasse (カップ：1点、1基)、Pot (瓶：1点、1基)、Unguentarium (香油瓶：1点、1基)。

テラコッタ製168基：器種不明 (302以上、138基 (9基で複数))、Amphorette (14点、11基)、Bol (4点、3基)、Bouteille (42点、15基)、Gourde (3点、3基)、Pichet (水差し：13点、10基)、Pot (8点、7基)、Assiette (皿：1点、1基)、Coupe (グラス：1点、1基)、Cruchon (小壺：2点、2基)、Gobelet (1点、1基)、Jarre (大型壺：1点、1基)、Plat (大皿：1点、1基)。

青銅製6基：Godet (2点、1基)、器種不明 (7点、6基)。

器種としては、Balsamaire (香油瓶)、Burette (小瓶) など瓶類が多く思えるが、大部分は器種不明な状態にある。

その他の比較的数の多いものとして、ランプ (126点 (テラコッタ、ガラス製)、59基) やタリスマン (68点 (鉛、青銅製)、53基)、オリーブの種 (29基、1基からオリーブ出土)、メダル (17点 (ガラス、金製など)、13基)、十字架 (13点 (青銅、金製)、13基)、アミュレット (11点 (鉛、鉄製など)、11基) があり、より数が少ないものとして、紡錘車、刃物 (ナイフ、なた、槍、のこぎり)、沈み彫り、小像、マスク、スカラベ、鍵、錠、天秤、分銅などがある。

(2) 副葬品セット

遺体に伴われた副葬品の基本セットは、貨幣、装身具、衣服、器類と考えられる⁽²²⁾。

貨幣は、カローンへの渡し賃であったかもしれない。少額貨幣を伴うのはギリシア起源の風習で、その場合貨幣を舌の下に入れるが、アル=バース・ネクロポリスでも青銅貨が口蓋にはり付いた事例が知られている (Com.17, S.1153-1154)。となれば、貨幣は、1人1枚か。その場合、貨幣は1535点出土しているので、1535人がこの墓地に埋葬されたことになる。しかし、頭蓋骨だけでも4000点近く、墓地の長期性に対しあまりにも少ない (500年間とすれば1年3人)。かなりの副葬品が失われているに違いない。

そして、イヤリング、ブレスレット、指輪などといった装身具が、場合によっては複数種類身に着けられた。金糸、銀糸で装飾された衣服も帯び、それはベルトを巻くことで固定されていた⁽²³⁾。ティールは織物業で著名であり、金銀刺繍も盛んであった。絹をはじめ様々な種類の布の工房が存在したと伝えられ⁽²⁴⁾、碑文における「職業」にも生糸の職人⁽²⁵⁾、ペルシア技巧の金銀刺繍を施す職人⁽²⁶⁾ が見出される。無論、金銀細工や絹は高級品のため、亜麻布で遺体を包んでいた可能性もあろう⁽²⁷⁾。装身具の存在は、生前の愛用品か埋葬時に特別に用意されたものかは

わからないが、死後の快適な生活のためであろう。出土数は僅かだが、化粧用へら（8点（青銅、銀製）、8基）はその典型例と考えられる。また、死後の悪意から肉体を守るアポトロパイク機能も意図されていたかもしれない⁽²⁸⁾。石棺の外面上における冒読者や略奪者への警告碑文⁽²⁹⁾、施されたメドューサの彫刻飾り、そして何より故人が身に着けたタリスマンやアミュレットの存在がそれを補強している。

器類は、その多くの器種が不明なため、用途判別は困難である。ただ、食器類や杯は酒宴の道具であろう。死者を記念し、死者を交え、楽しませる宴会の開催はよく知られている。そして、器の存在は、葬礼慣習や儀式の一端を示すものかもしれない。遺体に香油を振りかける慣習が知られており、その際芳香を長く維持するために遺体の傍らに香油瓶が置かれた。芳香には浄化の役割があることも指摘される⁽³⁰⁾。器種の材質選択理由は不明だが、ティールはガラス製造でも有名であり、テラコッタにせよガラスにせよあまり費用は変わらないように思える。

(3) 副葬品の変化

副葬品に変化はあるのだろうか。手がかりになるのは埋葬施設内の層位である。層位情報がほとんどないなか Com.6 M.789-780 L.2は、3～4世紀の砂層と2～3世紀の土層（表③）に、Com.30 M.4114 L.2は、4世紀～5世紀前半の砂層と3世紀後半～4世紀前半の土層（表④）に分けられる。そこで2つの層の副葬品を見てみると、明瞭な変化はない。2つの層は貨幣の年代が近いものの、明瞭に層は違うため、少なくとも3～5世紀の間くらいは副葬品に変化がなさそうである。

年代幅を広げるために、「郊外墓地」も取り上げたい。「郊外墓地」は、ティールの伝統的墓地であり、2～3世紀を中心に機能していた。残念ながらここでも盗掘がひどいものの、それでもブルジュ・アル・シャマリ所在壁画地下墓 TJ10からは⁽³¹⁾、調理・食器具土器、土製ランプ、ディオニュソス神の土製マスク、ガラス器、鈴、金環、青銅製筒状物品、ガラス玉、ムーレックス、二枚貝、青銅貨が、同所在壁画地下墓 T.01からは⁽³²⁾、様々な壺、甕、ランプ、ガラス瓶が出土している。興味深いのは T.01周辺のピット墓で、未盗掘（遺骸は検出されていないけれども）とされる H2からはサテュロス神の土製マスク、250点以上のガラス玉、2世紀の青銅貨幣1点、銅の不明物品1点、二枚貝2枚が、そして H1から炭化布片、H5から金製のイヤリング1点が出土している。特徴的な土製マスクもアル＝バース・ネクロポリスから知られており⁽³³⁾、故人や埋葬室ではなく墓単位になるけれども、「郊外墓地」出土副葬品の構成要素もアル＝バース・サイトと変わらない。ティールでは2～5世紀の間、副葬品セットに変化がないと見なせよう⁽³⁴⁾。ちなみに、ピット墓は地下墓に比べて貧しい人々の墓である可能性が高く、それを踏まえれば、財力の多少は、副葬品そのものの選択よりも枠内での材質、種類、数の差異として表出するかもしれない。

表③ Com.6, M.789-780 L.2

砂層 (上層)	土層 (下層)
貨幣：201-250年×1 (青銅) 351-400年×6 (青銅) 3世紀×2 (青銅) 4世紀×1 (青銅)	貨幣：101-150年×1 (銀)、×1 (青銅) 151-200年×1 (銀)、×1 (青銅) 251-300年×2 (青銅) 3世紀×1 (青銅)
装身具： イヤリング×2 (金)、×4 (銀) 玉×4 (ガラス)	装身具： イヤリング×1 (金) プレスレット×2 (ガラス) 鈴×1 (青銅) 玉×1 (ガラス)、複数 (その他扱い) ピン×複数 (骨)
器：不明×2 (ガラス)、2 (テラコッタ)	
その他：釘×2 (鉄)	

表④ Com.30.M.4114 L.2

砂層 (上層)	土層 (下層)
貨幣：301-350年×1 (青銅) 351-400年×4 (青銅) 401-450年×2 (青銅) 4世紀×5 (青銅) 不明×複数 (青銅)	貨幣：251-300年×4 (青銅) 301-350年×2 (青銅)
装身具： 指輪×3 (鉄) 輪×4+複数 (青銅)	装身具： イヤリング×5 (金) 玉×複数 (ガラス) 鈴×2 (青銅) ピン×複数 (骨)
	器：Bocal×1 (ガラス) Amphorette×2 (テラコッタ) Bouteille×7 (テラコッタ)
その他：タリスマン×1 (青銅)	

2 副葬品から見る古代末期のアル=バース・ネクロポリス

(1) 被葬者再考

それでは以上の副葬品情報を基に古代末期のアル=バース・ネクロポリスの考察を進めていく。まずは被葬者であり、はたしてアル=バース・ネクロポリスは古代末期に「上層」から「中間層」の墓地へ移行したのか。ここで興味深いのは、副葬品における金銀製品の多さである。イヤリングは813点が247基から出土し、その内、金製が153基435点、銀製が130基314点以上で、金銀製品が圧倒的に多い。これは輪状物品にもいえる (150点80基中、銀55点以上30基中、金5点5基中)。また、金糸・銀糸の他にも、メダル、葉飾り、ネックレスの部品といった多様なものがあり、しかも、たとえ鉄、骨製であっても、ピン、玉、プレスレット、ベルトのバックルな

どで金箔のはられた痕跡が見られる。実態はより多くの金銀製品が副葬されていたに違いない。

しかしながら長期間副葬品に変化がないことを思い返せば、副葬品の選択は、財的のみならず文化的理由のためかもしれない。となれば、被葬者層が変化していても表面上では分からないことになる。実際、先行研究によって石棺の納骨室に対する優位性は明らかにされているが、石棺と納骨堂で副葬品の種類と材質に差異はない。ただそうだとすると、「上層」が残存していたことは確かであろう。例外的事例ではあるものの、1基の石棺(Com.16 S.1085-1086)から21枚の金貨が出土している。その内訳は4世紀後半1点、5世紀前半20点であり、裕福な人物を複数人連続して埋葬したこと可能性が高い。また当該期には、モザイクや大理石で飾られた礼拝堂が少なくとも4堂出現している(Com.15, 24, 32, 35)。古代末期には、大理石がティール自体には輸入されていたけれども、墓地には流入せず、頻繁に再利用された。財は輸入大理石製石棺ではなく、礼拝堂建設へ投入されたようである。また、埋葬施設の譲渡者、寄進者⁽³⁵⁾の存在は、奴隷を含む、恩恵に与る比較的貧しい人々も存在していたことを意味しよう。実際、「自由身分」と総称される人々⁽³⁶⁾や「奴隷身分」の人々⁽³⁷⁾に用意されていた納骨室がある。古代末期のアル＝バース・ネクロポリスは、「中間層」だけの墓地ではなく、多様な埋葬者の混在する状況であった。

(2) 貨幣量分布

貨幣量の分布も興味深い。確かに貨幣年代は、埋葬年代ではなく、貨幣年代以降のみの指標に過ぎない。例えば、紀元前175～164年のアンティオコス4世の青銅貨(Com.18, M.1181-1182, L.1)は古すぎるし、銘文から154/155年に設置されることが分かるモザイクの上にある、つまり層位的にモザイクよりも新しいことになる石棺(Com.12, S.833-834)からトラヤヌス帝の貨幣が出土している。しかしながら、アル＝バース・ネクロポリスの動向を年代的に知る手がかりとなるのは間違いない。ちなみに、貨幣以外の副葬品は、その多くが、それ自体の考古学的研究によってではなく、貨幣を伴うことによって年代推定されるに過ぎないため、必然的に貨幣と同じ動向を示すことになる。

貨幣量は、3世紀から急増し、そこから4世紀にかけてピークを迎えた後、4世紀後半から5世紀に急減する(表⑤)。

貨幣増加は、軌を一にするアル＝バース・ネクロポリスの発展に理由を求められるが、貨幣減少はそう単純ではない。現在筆者が想定するのは3点である。つまり、①「墓荒しによる盗掘」のため、②「墓地が使用されなくなった」ため、③「葬礼慣習の変化」のため。①の「墓荒しによる盗掘」は、新しい時代の遺物は残存しやすい上、埋葬施設の継続的使用、つまり、新たに副葬品を収める契機も頻繁な状況にあっては、盗掘によって新しい物品のみが顕著に失われるのは奇妙である。

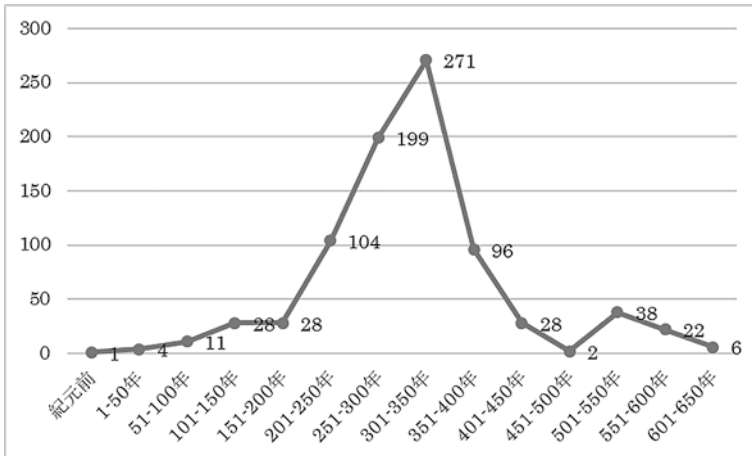
古代末期ティールの墓地と社会—アル=バース・ネクロポリスの分析から—（奥山）

②の「墓地が使用されなくなった」は、碑文によって否定される。アル=バース・ネクロポリス出土碑文の多くは5世紀以降の墓碑であり、7世紀まで墓地が機能し続けたことは確実である。そして最後の③「葬礼慣習の変化」が最もあり得よう。当該期のアル=バース・ネクロポリスの埋葬者は多様である上、長期間その副葬品は変化しないにもかかわらず、最大数出土物、言い換えれば代表的出土物である貨幣が4世紀後半～5世紀頃から急減した。これは葬礼慣習の変化に値する。

4世紀後半から5世紀以降のアル=バース・ネクロポリスにおける一番の変化は、de Jongも指摘する通り⁽³⁸⁾、キリスト教要素の登場である（例えば、礼拝堂建設、碑文に十字架・聖職者の出現、信徒団による墓管理の出現）。この点、7世紀末～8世紀以降のキリスト教的埋葬では副葬品を持たないのが標準的であり⁽³⁹⁾、財を救霊のための教会または修道院に対する寄進物に注ぐようになるとされるのは示唆的である⁽⁴⁰⁾。

4世紀後半から5世紀のティールは、本格的なキリスト教化の開始の時期にあたる。ティールには早くから、少なくとも1世紀半ばには信徒集団の存在が確認され、以後、多数の迫害を乗り越え発展し、ミラノ勅令後すぐにバシリカが建造される程であった。ただ急速な宗教的インフラの整備に比べ、人々の内面、すなわち葬礼慣習は少し遅れて、漸進的に変化したようである。葬礼慣習の変化は必然的に死生観の変化と関連し、そしてそれがティール全体に浸透していったのではないだろうか。

表⑤ 貨幣グラフ（50年単位：1535点のうち年代の把握できる838点のもの）



おわりに

本稿において、古代末期のアル＝バース・ネクロポリスの被葬者が多様な被葬者の混在する状況であったと指摘したが、ただそれはこの墓地が無秩序になっていた可能性も示唆している。実際、納骨室内の陶棺の上の約50の頭蓋骨⁽⁴¹⁾や、記念墓における大量の人骨の出土事例⁽⁴²⁾があり、とりわけ前者は墓に骨を放り込んだ感がある。ここで当該期、とりわけ5から6世紀のティールが危機に瀕していたことを述べておきたい。542から543年にはペストが大流行し、社会動乱も激しい時代であった。それはキリスト教の教義対立であり、ティールでは青党と「単性論派」対緑党と「正統派」の争いである⁽⁴³⁾。また、少なくとも8回の相次ぐ地震があり、とくに502年、551年のものがティールに大きな被害を与えた⁽⁴⁴⁾。以上のような状況にあっては、死者多数で、都市部が荒廃するのも不思議ではない。実際、アル＝バース・ネクロポリスは都市門内へ拡大、都市部も縮小し、海辺にあるフォルムは染色やガラス工房へ転換された⁽⁴⁵⁾。同時に、フォルムに隣接する港も放棄したように思われ、都市の混乱・弱体化を象徴していよう。都市部がこのような状況ならば、都市部の玄関口の墓地ですら乱雑を免れえず、無秩序にならざるを得ない。5世紀末から6世紀のティールは、斜陽の時代といえる。その後ティールはイスラム勢力によって635年に占領され、単なる港町へと没落の一途を辿ることになるが、その遠因は、当該期の弱体化にあっただろう。

参考文献・引用文献

- ・Badawi (2010): Badawi, A., *Tyre*, *Al-Athar Magazine*, 2010(3rd ed.).
- ・Butcher (2003): Butcher, K., *Roman Syria and the Near East*, British Museum Press, 2003.
- ・Chéhab (1965): Chéhab, M.H., “Chronique,” *Bulletin du Musée de Beyrouth (=BMB)* 18, 1965, pp.111-125.
- ・Chéhab (1983): Chéhab, M.H., “Fouilles de Tyr la nécropole I: L’arc de Triomphe,” *BMB* 33, 1983.
- ・Chéhab (1984): Chéhab, M.H., “Fouilles de Tyr: la nécropole II, Description des Fouilles,” *BMB* 34, 1984.
- ・Chéhab (1985): Chéhab, M.H., “Fouilles de Tyr: la nécropole III, Description des Fouilles,” *BMB* 35, 1985.
- ・Chéhab (1986): Chéhab, M.H., “Fouilles de Tyr: la nécropole IV, Description des Fouilles,” *BMB* 36, 1986.
- ・de Jong (2010): de Jong, L., “Performing Death in Tyre: The Life and Afterlife of a Roman Cemetery in the Province of Syria,” *American Journal of Archaeology* 114, 2010, pp.597-630.

- 古代末期ティールの墓地と社会—アル=バース・ネクロポリスの分析から— (奥山)
- ・ de Jong (2014-15): de Jong, L., "Displaying the dead: funerary practices in roman Lebanon," *Archaeology & History in the Lebanon (=AHL)* 40-41, 2014-2015, pp.135-145.
 - ・ Hajjar (1965) : Hajjar, J., "Un hypogée romain à Debaal dans la region de Tyr," *BMB* 18, 1965, pp.61-104, pls. I-XXIII, Fig. 1-3.
 - ・ Jidejian (1996): Jidejian, N., *Tyr à travers les ages*, Beyrouth, 1996.
 - ・ Rey-Coquais (1977): Rey-Coquais, J.-P., *Inscriptions de la Nécropole*(*BMB* 29), 1977.
 - ・ Rey-Coquais (1979): Rey-Coquais, J.-P., "Fortune et rang social des gens de métiers à Tyr au Bas Empire," *Ktèma* 4, 1979, pp.281-292.
 - ・ Rey-Coquais(1994): Rey-Coquais, J.-P., "La métropole de Carthage et de beaucoup d'autres villes, Tyr, aux époques romaine et paléochrétienne," in *L'Africa romana, Atti del X convegno di studio, Oriatano, 11-13 dicembre 1992*, a cura di Attilio Mastino e Paola Ruggieri (Sassari, 1994), pp.1339-1353.
 - ・ Rey-Coquais(1998): Rey-Coquais, J.-P., "Tyr, la nécropole et ses inscriptions," in *Acta XIII Congressus Internationalis Archaeologiae Christianae* (Città de Vaticano-Split, 1998), vol.3, pp.685-691.
 - ・ Rey-Coquais (2001): Rey-Coquais, J.-P., "Une ville du Proche-Orient à l'époque paléochrétienne d'après ses inscriptions: Tyr au Ve et au Vie siècle," in B.Iwaszkiewicz-Wronikowska, D.Próchniak(éd.), *Symposium kazimierskie*, II, Tomarzystwo naukowe KUL, Lublin, 2001, pp.197-213.
 - ・ Rey-Coquais(2005): Rey-Coquais, J.-P., "Tyr aux derniers siècles paléochrétiens: autour du synode de 518," *Mélanges de l'Université Saint-Joseph* 58, 2005, pp.513-530.
 - ・ Rey-Coquais (2006): Rey-Coquais, J.-P., *Inscriptions Grecques et Latines de Tyr (Baal Hors-Série III)*, 2006.
 - ・ Rey-Coquais (2010): Rey-Coquais, J.-P., "Le Liban Chrétien des origines à Justinien," *Cristian footprints in the Lebanon (AHL 32-33)*, 2010, pp.1-26.
 - ・ Salamé-Sarki(1986): Salamé-Sarkis, H., "La nécropole de Tyr: à propos de publications récentes," *Berytus Archaeological Studies* 34, 1986, pp.193-205.
 - ・ Sbeinati (2005): Sbeinati, M.R., Darawcheh, R., Mouty, M., "The historical earthquakes of Syria: an analysis of large and moderate earthquakes from 1365 B.C.to 1900 A.D.," *Annals of Geophysics* 48-3, 2005, pp.347-435.
 - ・ 奥山 (2013) : 拙著、『古代東地中海地域の碑文研究—都市ティールを中心に—』、学位請求論文 (広大甲第6029号)、2013年
 - ・ 奥山 (2014) : 拙稿、「ローマ時代ティールの郊外墓地と社会変化」、『史学研究』284、2014年、1-26頁。
 - ・ ギアリ (1999) : パトリック・ギアリ著、杉崎泰一郎訳、『死者と生きる中世 ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』、白水社、1999年。

- ・京大考古 (2013) : 京都大学大学院文学研究科 (代表者 泉拓良)、『平成21～23年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書 (課題番号20251007) フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海』、2013年。
- ・佐藤ほか (2000) : 佐藤彰一、池上俊一、高山博編、『西洋中世史研究入門』、名古屋大学出版会、2000年。
- ・多田 (2013) : 多田哲、「キリスト教化と西欧世界の形成」、堀越宏一、甚野尚志編著、『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』、ミネルヴァ書房、2013年、15-35頁。
- ・西山 (2018) : 西山要一、「レバノン共和国ティール市近郊ブルジュ・アル・シャマリ T.01 遺跡—ローマ時代の壁画地下墓の保存修復研究—」、『レバノン共和国ティール市近郊ブルジュ・アル・シャマリ T. 01遺跡保存修復研究』、奈良大学・奈良大学保存科学研究室、2018年、7-22頁。
- ・早川 (2005) : 「第4章 家族と血縁の紐帯」、佐藤彰一、池上俊一、高山博編、『西洋中世史学入門 [増補改訂版]』、名古屋大学出版会、2005年、66-81頁。
- ・藤井 (2009) : 藤井慈子、『ガラスのなかの古代ローマ 三、四世紀工芸品の図像を読み解く』、春風社、2009年。
- ・ホプキンス (1996) : キース・ホプキンス著、高木正郎、永都軍三訳、『古代ローマ人と死』、見洋書房、1996年 (原書1983年)。
- ・堀越 (2005) : 堀越宏一、「第10章 中世考古学」、高山博、池上俊一編、『西洋中世学入門』、東京大学出版会、2005年、181-196頁。

註

- (1) ティール (Tyr) という都市名は、フランス語であり、英語ではタイアー (Tyre)、アラビア語ではスール (Sour) と呼ばれ、聖書ではツロと表記される。ローマ時代には、ラテン語でテュルス (Tyros)、ギリシア語でテュロス (Τύρος) と呼ばれていたが、わが国ではそれらの呼称は、世界史の授業において「フェニキア人の中心都市シドンとテュルス」と習うように、フェニキア時代のイメージが強すぎる。本稿では主としてローマ時代のテュルスを検討するので、フェニキア時代のイメージから離れるために、現代の呼称であり、レバノン日本調査隊が用いている「ティール」でこの都市を表現する。
- (2) 遺跡の概略については Jidejian (1996), pp.180-238 や Badawi (2010), pp.64-89 を参照。
- (3) Rey-Coquais (1977), No.69 (ティール歴280年 = 西暦154/155年); Rey-Coquais (1977), No.200 (ティール歴734年9月7日 = 西暦609年9月7日)。
- (4) Rey-Coquais (1977), No.20A, B, C; Rey-Coquais (1977), No.33A, B, C など。
- (5) Rey-Coquais (1977), No.38; Rey-Coquais (1977), No.135A など。
- (6) Rey-Coquais (1977); Rey-Coquais (2006)。「非文字情報」(形態、場所、文字、材質、装飾) の観点も加えて先行資料集を改定した奥山 (2013) も参照。

- (7) Rey-Coquais (1979)；奥山 (2013)、149-166頁。
- (8) 奥山 (2014)。
- (9) Chéhab (1983, 1984-1986)。
- (10) de Jong の提示するアル=バース・サイトの3つの段階は以下である。
 - ①アル=バース・サイトの創設期 (1世紀末)。道路沿い (墓と道路の間に平均して8mのオープンスペースが存在) に、埋葬施設 (納骨堂・納骨室、石棺) の出現。
 - ②—①アル=バース・サイトの発展期 (2~3世紀)。埋葬施設建築のピーク、公的建造物 (アクアダクト、記念門、戦車競技場、道路敷設) の建造と墓の道路への接近。
 - ②—②アル=バース・サイトの衰退期 (4世紀)。埋葬施設建築の停滞、墓の再利用 (改装による追加機能 (儀式関係?) も含む) の開始、キリスト教建築物 (礼拝堂など) の登場。
 - ③アル=バース・サイトの再生期 (4/5~7世紀)。5~6世紀に再利用のピーク、新たな墓の建造はなく、再利用・宗教的建造物 (主としてキリスト教関係) への転換のみ。5~6世紀までに墓が道路際まで接近、一部は道路を侵食。
- (11) これらの報告書について、自らも発掘に従事した Salamé-Sarki は、その書評において報告書の様々な不備を告発している：Salamé-Sarki (1986)。抽出するデータに関わる問題であり、極めて重要な指摘であるが、筆者の手に余る問題のため本稿では考慮しない。
- (12) de Jong (2010) では総数825基と数えられ、その内訳は39の埋葬複合体に、納骨室449基、石棺357基、ピット墓 (Pit graves) 19基となっている。総数の違う理由は明瞭ではないが、発掘報告書にはない「ピット墓」という分類から、現地調査を加味した結果であると想定される。
- (13) 石棺は蓋と身の部位から構成され、身の上に蓋が被さった一組からなる埋葬施設である。おおまかに分けて切妻屋根と平屋根のタイプがあるが、切妻屋根石棺がほとんどを占めている。地元産の石灰岩のほか、輸入石材 (ベンテリコン産大理石、プロコネソス産大理石、アツソス産火山岩、エジプト産斑岩) が用いられ、小さいものでも1.80×0.73×0.69m、大きなものになると2.43×1.21×1.15mの大きさを誇る。個体差が激しいため、規格は想定されず、材質ごとの寸法の違いも見受けられない。
- (14) 納骨室は、遺骸を取める横穴式の空間である。報告書に寸法は記されていないが、開口部のみその閉じ蓋 (厚さ4-5cm程度、一辺50数cmの正方形の一枚板 (大理石、石炭岩、漆喰で代用) で、場合によっては縦が長い長方形 (例えば、60×36cm) から推測できる。納骨堂 (Massif) は、この納骨室をコインロッカーのように複数備えるものである (これも全体の寸法は不明)。埋葬施設数は納骨室を数えたものであるが、納骨室が1つのみの場合、納骨室=納骨堂となるので納骨堂・納骨室と並記している。
- (15) 報告書において、墓は、納骨室同様納骨堂に属すもの (例えば、Com.3,M.113-114,

- T.113A・T.114A)、あるいは納骨室を備える埋葬施設そのもの（例えば、Com.1, T.150）として表れている。区別の基準は記されており、筆者には納骨堂・納骨室との区別がつかない。
- (16) Caveau, Cella, Fosse についても明確な記述はなく、事例も少ないが、Caveau, Fosse はピット墓、Cella は納骨室に類するものと考えられる。
- (17) Com.21, S. No889-890においてのみ火葬骨の記述がある。
- (18) Com.4, M.1941, L.1~3; Com.10, Cercueil, No851-852; Com.13, S.865-866; Com.15, T.3394など。
- (19) Com.2, M.129-130, L.3; Com.9, T.764-768, Cella2, Cella 4など。
- (20) Com.1, M.146-148, L.4; Com.4, S.725-726; Com.16, T.1084など。
- (21) 金メッキ：1点（Com.6, M.789-790, L.3）。銀メッキ：7点（Com.5, M.644-645, L.3; Com.12, S.833-834; Com.17, S.1141-1142; Com.24, M.3914-3918, L.4; Com.32, M.4177, L.1; Com.33, S.668-669; Com.34, M.1-4, L.3）。
- (22) 同様なことを de Jong はティールも含めたローマ期のレバノン全体について指摘している：de Jong (2014-15), pp.5-7。
- (23) 織物の痕跡のあるバックル：Com.26, M.3812-3813, L.5。
- (24) Procopius, *Anecdota*, 25.14-16：「絹製の衣服は、古くからフェニキアのペリュトスとティールの都市で製造されるのが常であった。そしてこれらの材料の商人、職人、熟練工が古くからそこに住み、この製品はそこから全世界にもたらされている」。Antoninus Placentini, *Itinerarium*, 2：「(前略)。ティールについて、住民は裕福だが、暮らしぶりは邪悪である。言語に絶する贅沢さのためだ。絹を始めとする様々な織物工場がある。(後略)」; Rey-Coquais (1977), pp.156-157; Rey-Coquais (2001), p.204.
- (25) μεταξάρτιος: Rey-Coquais (1977), No22, 98.
- (26) βαρβαρικάριος: Rey-Coquais (1977), No122, 123.
- (27) ティールは亜麻布の生産でも著名であった：Jidejian (1996), p.149。亜麻布の商人（ὀθωνιακὸς）による奉納碑文も知られている：Rey-Coquais (2006), No14。
- (28) de Jong (2014-15), pp.5-7.
- (29) Rey-Coquais (1977), No17A, 29B, 100, 108.
- (30) 藤井 (2009)、26-27頁。de Jong (2014-15), pp.7-8.
- (31) 京大考古 (2013)、17-52頁。
- (32) 西山 (2018)、11-22頁。
- (33) テラコッタ製マスク：Com.5, M.644-645 L.5; Com.24, M.3914-3918 L.4。テラコッタ製ディオニュソス神マスク：Com.6, M.789-790 L.3。
- (34) この点について、ティール都市部南西14kmに位置する村 Deb'aal で発見された地下墓の事例も参考になる（Hajjar (1965)）。地下墓は総計36の埋葬箇所（13の納骨室に26、主室に10）を備える大規模なもので、稀なことに未盗掘であり（ただし石棺

の外で副葬品（ランプ、ガラス器）が出土しているので古代における盗掘は可能性あり）、ガラス器や装飾具を始めとした多くの貴重な遺物、中でも状態のよい29基の鉛棺の出土は特筆に値する（石棺は3基で、その2基で鉛棺を、1基で木棺（鉄釘の出土）を収納している）。機能年代は、貨幣が1点（銀貨：カラカラ帝（208～212年））を除いてすべて1～2世紀であること、石棺に彫られた2世紀の墓碑碑文（Hajjar（1965）, pp.71-72: Βωδοστάρτοσε τῶν ΔΕ΄ χρηστὲ καὶ ἄλοιπε χαίρε | ἔτους ΒΕΣ΄ μη(νός) Δεΐου ΙΖ΄ 「非常に素晴らしき、惜しむべき、ボードスタルトソスよ、さらば。35歳。262年ディオスの月17日（紀元136年11月19日）」）から、主に1～2世紀であろう。副葬品は、例えば Loculus 7（石灰岩製石棺内鉛棺）では貨幣×3（トラヤヌス帝：112～113年、ハドリアヌス帝：128～132年、カラカラ帝：208～212年、すべて銀貨）、イヤリング×2（金）、指輪×1（金）、器×1（ガラス）、ランプ×2）であり、埋葬施設の構成要素と状態とならんで、「郊外墓地」やアル=バース・ネクロポリスと同様である。1世紀の貨幣を多数（27点中12点）含むことは、副葬品セットを1世紀に遡らせるかもしれない。Tombe 19では革靴が二組出土しており、衣服の様相を補強している。

- (35) Rey-Coquais (1977), No121,166.
- (36) Com.I,M. No158-161 Ouest.;Rey-Coquais (1977), No44.Com.I, M. No170-171, L.1,2; Rey-Coquais (1977), No45, 46. Rey-Coquais (1977), No165.
- (37) Com.I,M. No170-171, L.3;Rey-Coquais (1977), No47.Rey-Coquais (1977), No132.
- (38) de Jong (2010), pp.614-617.
- (39) 多田 (2013)、30-32頁；ヨーロッパ（フランク）の事例であるが、堀越（2005）、187-189頁。
- (40) 早川（2005）、77頁。
- (41) Com.2 M.129-130 L.3.
- (42) Com.9 T.764-768 Cella2（167体、内12体陶棺内）、Cella3（約75体）、Cella5（95体）。
- (43) Rey-Coquais (2001); Rey-Coquais (2005).
- (44) 502年のものはMSK 震度階 XII 段階中 VII-VIII（大体震度5強から6弱）で都市の半分が倒壊（Sbeinati（2005）, p.355）、551年のものはMSK 震度階 VIII-X?（震度6弱から7）で津波によって港など都市の一部が海中に沈んだ（Sbeinati（2005）, pp.357-359）。その他のフェニキア・シリア地域における地震についても Sbeinati（2005）, pp.353-405は紀元前1365年から紀元1900年まで3000年間に亘る詳細なデータを提示している。
- (45) Chéhab（1965）, p.114; Rey-Coquais（1994）, p.1344; Jidejian（1996）, p.244; Badawi（2010）, pp.96-97,101.